奈良県立橿原考古学研究所紀要
考古学論攷　第 42 冊　2019 年

日本出土絵馬の基礎的研究

前 田 俊 雄

目　次

Ⅰ．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
Ⅱ．意匠からみた出土絵馬・・・・・・・・・・・・・・・・・35
Ⅲ．絵馬の使用方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
Ⅳ．出土絵馬からみた絵馬祭祀の起源・・・・・・・・・・・42
Ⅴ．まとめと今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・46

論　文　要　旨

日本出土の絵馬には、絵馬に用いられる板材の木取りや法量、馬の表現方法や使用方法などといったさまざまな要素を共通させる一群が存在する。その一群は平城京を中心とした畿内地域に分布しており、畿内地域では規格性をもった絵馬祭式が執り行われていたものと考えられる。

また絵馬のなかで特徴的な要素に、「側対歩」歩様の馬の図像をあげることができる。この「側対歩」歩様は、元来中国在来やモンゴル高原に生息する馬の歩様である。この馬の歩様の表現は漢代以降中国大陸で広がっていくが、この図像の遣唐使による日本列島への移入を想定した。

７世紀後半以降、奈良時代にかけて、日本列島では数多くの災害や疫病の記録が残されている。このような状況のなか、遣唐使を通じて入手された最新の情報を用いて、新たな祭祀である絵馬祭祀を開始し、事態に対応しようとしたものと考えられる。

前 田　俊 雄（まえだ　としお）
奈良県立橿原考古学研究所　主任研究員

Ⅰ．はじめに

日本列島では古来より、さまざまなかたちの祭祀がとりおこなわれてきた。そのような祭祀のなかのひとつに絵馬祭祀がある。絵馬奉納の習俗は、馬を「神馬」とする文化に根ざして発展してきたと考えられる。この「神馬」という言葉は、『続日本紀』大宝２年（702 年）四月乙巳条の「飛騨国献神馬」が初出である。また神に献上する馬という意味では、『常陸国風土記』に崇神天皇の時代から献馬の風習があったという記事がみられる。これまでの絵馬研究は、寺社に奉納されたものをおもな対象としておこなわれてきたが、伊場遺跡の発掘調査における絵馬の出土をきっかけに、出土絵馬についても注意が払われるようになっている。近年は発掘調査による絵馬の出土例も増え、資料数が増加している。

これまでのところ日本列島において、出土絵馬は 39 遺跡 104 例が知られている（表１）。出土範囲は現在の秋田県から福岡県まで、日本列島の広範囲におよぶ。なかでも近畿地方と静岡県[1)]で出土が多く知られている。

現在確認されている最古の出土例は難波宮西北谷出土例であり、７世紀第４四半期をくだらないと想定されている。またこれ以外にも、奈良市平城京二条大路出土例や同日笠フシンダ遺跡出土例が８世紀前半と想定され、古い出土例として知られている。

絵馬研究はこれまでに民俗学を中心におこなわれてきた。古くは江戸時代においては、絵馬の図柄やその絵師について関心が払われていた。その起源については神馬奉納がかなわない人々が、絵馬を納めたとされた。近代以降、絵馬の起源について供犠の視点（中山 1930）や絵馬奉納に対する心意を重視する視点（柳田 1930）といった視点が提示され、その後は絵馬奉納の心意を重視するという方向に沿って、研究がすすめられていった。そして現在は古代の生馬献上が簡略化し、馬形献上の風習が生まれ、そこから絵馬が誕生したという見解が出され（岩井 1974）、定説として一定以上支持されているという状況である。

一方、近年発掘調査が進むにつれて、絵馬の発掘例が増加するようになってきた。その結果、近年考古学の立場からも絵馬の研究がおこなわれるようになっている。考古学の立場における初期の絵馬研究は、「神道考古学」の立場から絵馬に関する研究がすすめられた。考古学における絵馬研究の大きな転換点となったのは、伊場遺跡における奈良時代絵馬の出土である。伊場遺跡出土絵馬は従来知られていた最古の絵馬をはるかに遡るものであるとともに、殺馬祭祀および絵馬が、殺牛祭祀が中心とされてきた漢神祭祀に関連すると説く見解がだされた（水野 1978）。

その後「律令的祭祀」の観点から、絵馬について大祓の祓具のひとつとし、律令国家の祭式に取り入れられたものという位置づけがなされている（金子 1985・水野 1983 など）。また、平城京二条大路から絵馬が出土し、これを中心とした研究がすすめられていく。平城京二条大路出土例は都城における出土絵馬の基準資料となり、各地で出土する古代絵馬の比較研究に際する指標となっている。そして「側対歩」の歩様の共通性や、牡を右向きに牝を左向きとし、二枚一対として使用する可能性が示唆されている（次山 2000）。そしてこのような一定の規範に則った初期の絵馬を「都城型絵馬」とする意見が出されている（江浦 2006）。このように考古学による絵馬研究は、基準資料となる絵馬の出土とともに深化していったことがわかる。

これらの研究史を踏まえ、本稿では出土絵馬を対象として、その性格を検討する。あらためて絵馬の意匠や絵馬に残された使用状況の痕跡を中心として列島全域を対象として分析をおこない、これまでにも指摘されてきた絵馬における意匠の共通性の有無やその範囲、絵馬の使用法とその共通点、相違点といった点を中心に検討を加えていく。

Ⅱ．意匠からみた出土絵馬

（１）絵馬の使用板材

絵馬は木材を板材にして、その表面に絵を描き作製する。まずはこの土台部分となる板材部分の検討をおこなう。絵馬に使用される木材は、これまでにスギやヒノキといった樹種が知られているが、このなかでもヒノキの使用例が多くみとめられる。現状では特定の樹種の材をもちいた絵馬が特定の地域に多くみとめられるということはなく、木材の種類と地域性には相関性がみとめられない。また時期的な変化についても同様である。このように絵馬の使用木材はスギやヒノキといった針葉樹材が

一般的に用いられ、なかでもヒノキの例が多くみとめられるが、この用材の選択には地域性や時期差は見出しがたい。

また板材の木取りについては、柾目のものと板目のものが確認でき、これまでに木取り判明しているものは柾目のものが 27 点、板目のものが 47 点である。この木取りの差異が生じる要因としては時期差と地域差が想定される。まず時期差については、８世紀前半の絵馬が広く普及しはじめる段階では絵馬の木取りは柾目、板目ともに確認することができる。そしてそれ以降の各地に絵馬が広がっていった段階でも柾目、板目の絵馬がともに確認される。このことから、絵馬の板材における木取りの差異は、時期差に起因するものではないことがわかる。これに対して地域差であるが、柾目の絵馬と板目の絵馬はともに日本列島各地に広く分布していることがわかる。ただしここで注目すべき点は平城京を中心とした奈良盆地内の様相である。奈良盆地内で木取りが確認できる絵馬９点のうち、７点が柾目となっており、この比率は同時期の他地域と比較しても圧倒的に高いものである。このことから絵馬の板材の木取りは、平城京周辺では柾目の板材を用いることが一般的であり、また他地域の様相と比較して特異な点である（図１）。

次に絵馬の法量について検討する。出土絵馬は縦横ともに法量が判明している事例は限られている。絵馬に用いられる板材の木取りの関係から、より縦辺が欠損しやすい。縦横ともに法量が判明しているものは 32 例で、横のみのものは 28 例、そして縦のみのものは２例のみである。これら絵馬の法量は、横辺長 15cm を境としてこれより大きいものと小さなものの２群にわけることができる。この法量の小さな絵馬は、例外はあるものの、畿外地域を中心に分布することが一般的である。なかでも伊場遺跡など東海地域で分布が顕著である。この小型の絵馬は９世紀後半以降の新しい時期と考えられるものがある一方、それ以前の時期のものも存在しており、一概に時期が新しいために小型化したとはいえない。

一方、絵馬の法量を決定する際にどのような尺度を用いるのか、ということは検討すべき点である。７世紀以降の尺度としては高麗尺と唐尺が存在しているが、713（和銅６）年には高麗尺が廃止され、唐尺に統一化される。そこで出土絵馬の法量をみると、出土絵馬には唐尺が用いられていると考えられる資料が多々見受けられることがわかる。現在確認されている出土絵馬のうち、最大のものは横辺長がほぼ１尺に相当する。また他の例も大型の一群は、６寸、７寸、８寸、９寸付近にそれぞれ横辺長が集中するものが目立つ。また大型品と小型品の境界が５寸に相当することも注目される（図２・３）。

このように絵馬は唐尺を用いて、規格性をもって製作された可能性が想定される。

（２）馬の向きと性差

絵馬に描かれた馬には、向って右向きに描かれたものと、左向きに描かれたものの２種類が存在している。この馬の向きには特徴があり、全国出土例をみると右向きのものが 29 例であるのに対し、左向きのものは 61 例

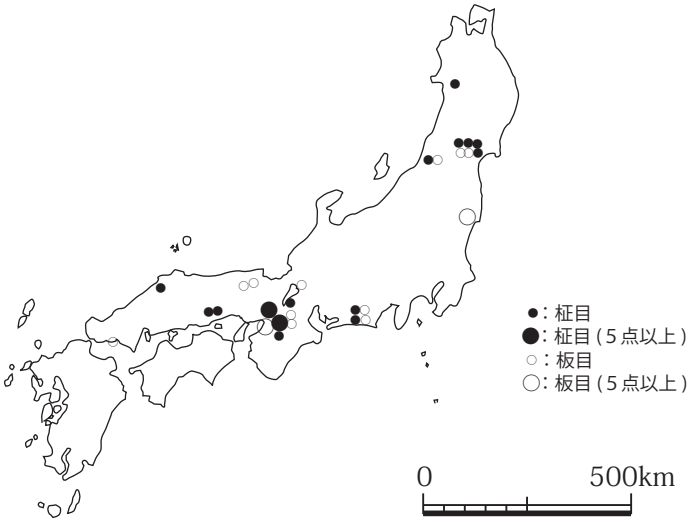


図１　出土絵馬における木取りの地域差

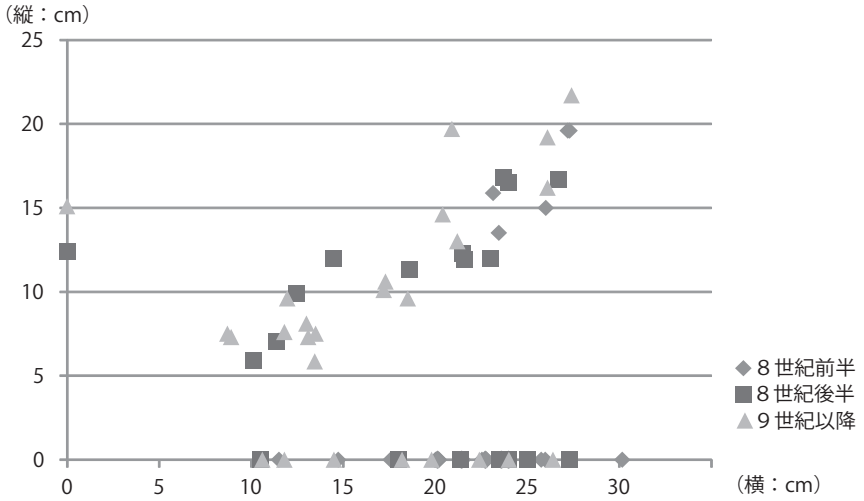


図２　出土絵馬の法量

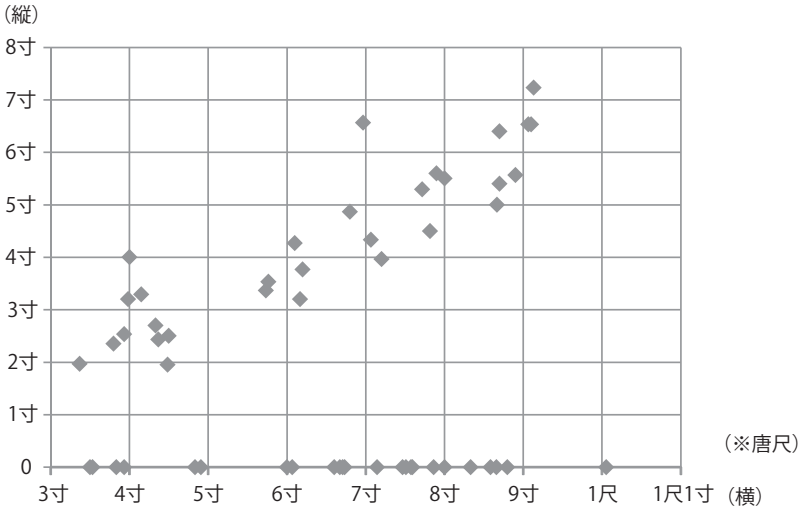


図３　出土絵馬の法量と尺度

である。一方出土例を畿内地域に限定すると、右向きのものが 25 例であるのに対し、左向きのものは 32 例である。よって畿外地域出土絵馬では、右向きのものが 4 例であるのに対し、左向きのものは 29 例となる。このことから、右向きの馬が描かれた絵馬の大半が、畿内地域で出土していることがわかる（図４）。

この馬の向きにはいったいどのような意味があるのであろうか。これまでに馬の方向と、描かれた馬の性差の関係についての指摘がなされている。すなわち、右向きの絵馬には牡の表現が描かれている傾向があるというものである（次山 2000、江浦 2006 など）。そして左右の向きの２枚の絵馬、すなわち牡牝の絵馬２枚を一対として使用する、という指摘がなされている。

これに対して、馬の方向には特に意味はないという指摘もある。実際の出土例では 1 点のみの出土が多く、また性差表現も確認できない事例が多い。また必ずしも右向きだから牡、左向きだから牝ということはなく、むしろどちらの向きであっても性差は表現されていない例が多い。このことから、絵馬の馬方向には特別な意味がないという見解も示されている。このほかにも、認知科学の面から、現代日本人を対象とした場合、大多数が動物画を左向きに描くことが指摘されている。認知論の分野では民族や文化によってこの傾向が異なることが指摘されており、現代と当時の時間差が問題となるものの、絵馬に描かれた馬の方向が特別な意図を反映していない可能性も指摘されている（松尾 2006）。

このように絵馬に描かれた馬の方向は、そのもつ意味には異なる見解がこれまでに示されている。ここであら

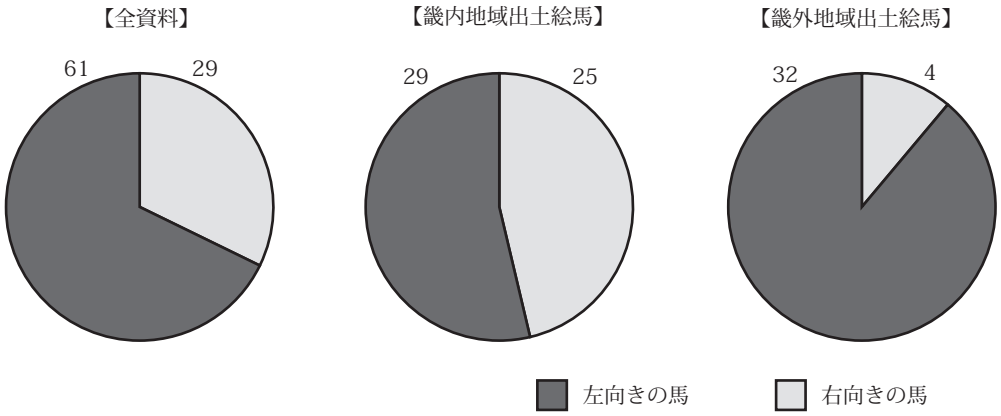


図４　馬の方向の比率（数字は点数）

ためて出土絵馬を検討すると、次のことがわかる。全国各地の絵馬をみると１枚単独での出土例が多く、また性差が表現されないものが多い。ただし畿内地域出土絵馬をみると、平城宮跡や難波宮跡出土絵馬は、左右２枚の絵馬を一対にして使用されたと考えられる。また性差表現が描かれた馬が絵馬に描かれた例が、一定数確認されている。このことから、平城京や難波宮といった宮都周辺では左右の方向の馬が描かれた絵馬、すなわち牡牝の馬が描かれた絵馬を２枚１対にする使用法がとられていた可能性がある。

（３）馬の歩様表現

馬の歩様表現にはさまざまな種類がある。美術品などにみられる伝統的な主な歩様表現には、「パッサージュ」や「側対歩」（ペーサー）、「フライング・ギャロップ」などがある。これらの歩様のうち出土絵馬には「側対歩」の歩様をとる馬が描かれているものがある。「側対歩」は歩行する際に右側の前脚をあげるときに同じく右側の後脚をあげて進む、といった同一側の前脚と後脚をあげる歩様である（図５）。この歩様は中国在来系、あるいはモンゴル高原の馬に特徴的な歩様であり、現地では今日でも確認することができる（末崎 1987）。

日本出土絵馬のなかにはこの「側対歩」の歩様をとる馬が描かれているものが存在する（図６）。この「側対歩」の馬を描いた絵馬が、平城京を中心とした畿内地域で集中して出土している。畿内地域では平城京二条大路や日笠フシンダ遺跡、讃良郡条里遺跡などから出土しているのに対し、畿外地域では伊場遺跡などから出土している。畿内地域では全出土例 57 点のうち、「側対歩」の歩様が確認できるものは 16 点である。これに対して畿外地域では全出土例 44 点のうち、「側対歩」の歩様が確認できるものは３点である。

このように「側対歩」の絵馬は畿内地域を中心に集中して出土していることがわかる。畿内地域は古い時期の絵馬が集中する地域でもある。ではこの「側対歩」表現の絵馬の使用は、時期差に起因するものであろうか。次はこの点について検討をおこなう。

「側対歩」表現の絵馬は７世紀第４四半期の絵馬の登場段階から確認することができる。難波宮跡から出土した絵馬のなかにはすでに「側対歩」表現を確認することができる。一方「側対歩」表現をとらない絵馬も、難波宮跡では確認することができる。７世紀の第４四半期の絵馬は難波宮跡例のみであるため、難波宮跡の例は特殊事例であることは否定できない。そこで次の時期である８世紀の出土絵馬をみると、出土例は畿内地域に多くみとめられる。やはりこの時期でも「側対歩」をとる馬とそうではない馬が描かれたものの、２種類の絵馬が確認できる。このことから、「側対歩」表現の絵馬は時期差によって使用される、つまり「側対歩」の絵馬がその他の歩様の馬が描かれた絵馬に先行して用いられるというのではなく、絵馬の導入段階において、最初から２種類の絵馬が用いられていたことがわかる。

このように「側対歩」の歩様をとる馬が描かれた絵馬は、平城京を中心とした畿内地域を中心として用いられ

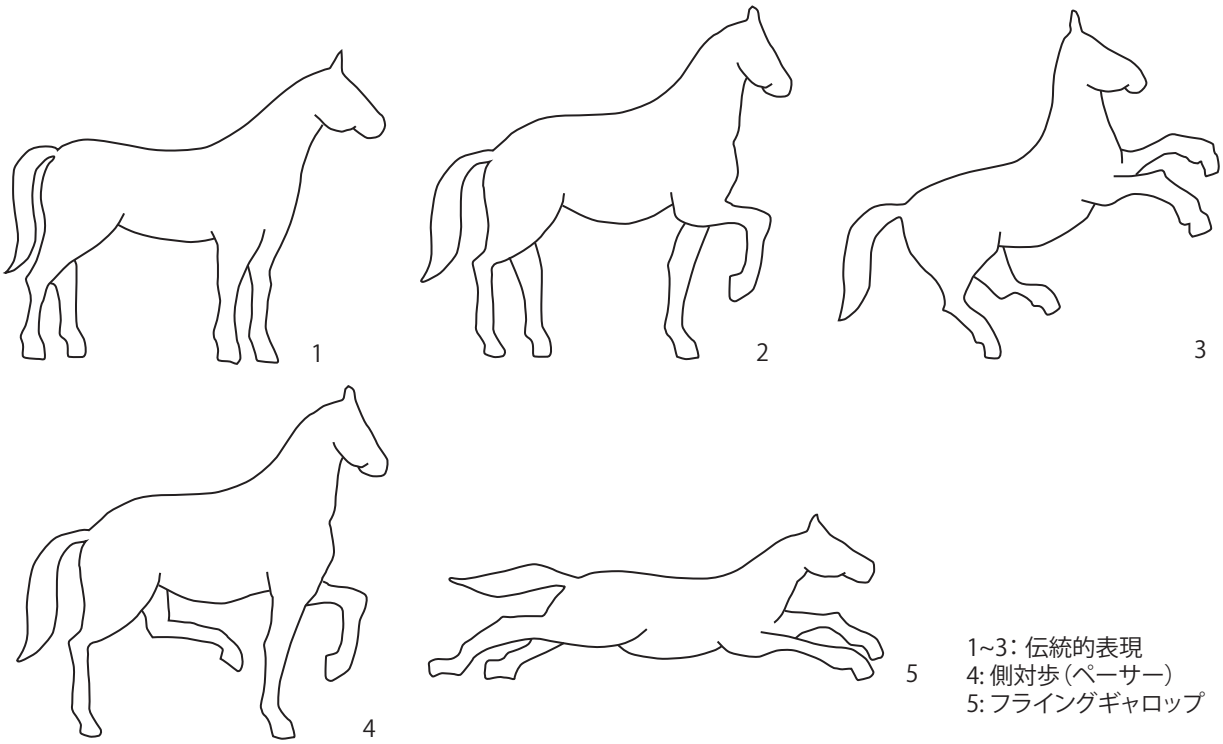
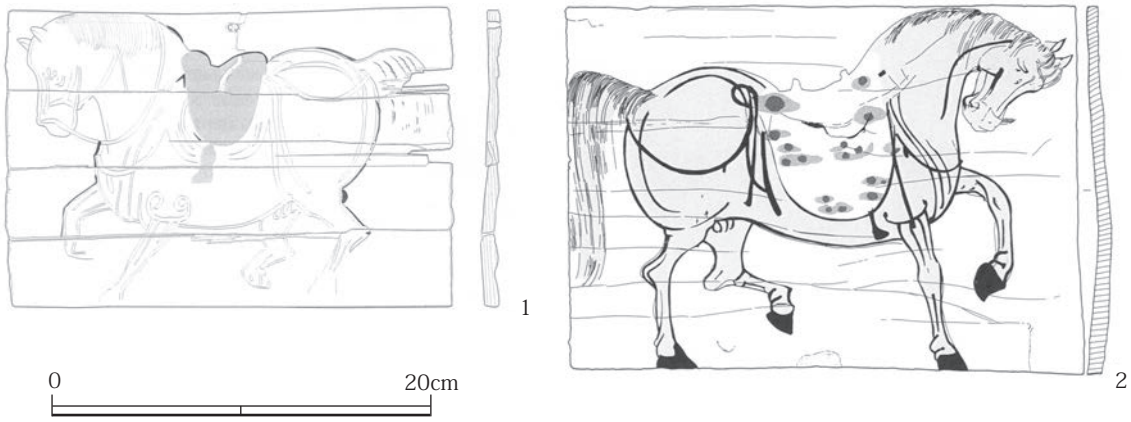


図５　馬の歩様の表現



１：難波宮跡絵馬１　　２：平城京二条大路

図６　「側対歩」表現の絵馬

ていたことがわかる。一方畿外地域では、「側対歩」の歩様をとる馬が描かれた絵馬はまれである。そして絵馬に描かれた馬の歩様が「側対歩」表現をとるかとらないのか、ということについては時期差ではなく、地域差に起因するものであることがわかる。これらのこと踏まえると、平城京を中心とした畿内地域では、そのほかの地域ではあまりみられない「側対歩」表現の馬が描かれた絵馬が、多く使用されていたことがわかる。このことから、絵馬の図像には地域性が存在することが想定される。

（４）馬装の表現

絵馬に描かれている馬には馬装をもついわゆる「飾馬」と、馬装をもたない「裸馬」の２種類がある。「飾馬」はおもに平城京などを中心とした畿内地域を中心として分布しており、８世紀以降、日本列島各地で広く確認することができる。一方「裸馬」の絵馬は日本列島に広く

分布している。またその時期については、日本列島で広く絵馬が使用されはじめる８世紀以降確認されるようになる。またその分布においては、「飾馬」、「裸馬」ともに８世紀以降日本列島各地に分布しており、その差異に時期差や地域差はないものと考えられる。

この絵馬における「飾馬」であるが、その表現方法に特徴がある（図７）。平城京二条大路出土例をみると、鞍の部分が墨で黒く塗りつぶして表現されている。一方、市川橋遺跡出土例をみると、鞍の部分が墨でかなり精緻に表現されているものの、墨による塗りつぶしはおこなわれない。また鹿田遺跡例では鞍の外形を墨で描き、中は墨で塗りつぶさない。このように「飾馬」の鞍部分の表現をみると、鞍を墨で塗りつぶして表現されるものと、そうではないものの２通りのものが存在することがわかる。この鞍の表現は、前者のものは平城京を中心とした畿内地域を中心として出土しており、畿内地域以外では大将軍遺跡などで確認されている。一方、後者のものは伊場遺跡例や青木遺跡例などが代表的である。なお畿内地域では、このような鞍の表現をする「飾馬」が描かれた絵馬は確認されていない。このように絵馬の「飾馬」における鞍の表現は、畿内地域とそのほかの地域では大きく異なっていたことがわかる。ただしこの鞍部分を墨で塗りつぶして表現するものにも、複数の形状のものがあることがわかる。多くの例では鞍の形状から円形から楕円形で表現されているが、一部方形の鞍が表現されている。方形の墨塗り鞍の絵馬は払田柵跡[2)]と戸原麦尾遺跡で出土しており、このことから円形の墨塗り鞍を描く絵馬は、畿内地域およびその隣接地域でのみ出土していることがわかる。一方で方形の墨塗り鞍を描く絵馬は、畿内地域では確認することができない。

絵馬における「飾馬」は、畿内地域を中心として確認することができる。なかでも「飾馬」の鞍部分の表現に特徴がみとめられ、平城京周辺を中心とした地域では「飾馬」の図像表現に一定の規範が存在していたことが考えられる。

（５）小結

ここまで絵馬に描かれた馬の意匠から、出土絵馬の性格について検討をおこなってきた。

馬の意匠については、平城京を中心とした畿内地域に特徴的なものがあることがわかる。畿内地域では左右の向きの絵馬が、ほぼ１対１の比率で出土しており、また左右の向きの絵馬を２枚１対で使用した思われる例も確認できる。馬の歩様についても「側対歩」の歩様をもつ絵馬は畿内地域を中心に出土し、また「飾馬」の鞍の表現方法についても円形の形状を呈し、内側が墨で塗りつぶされるなど、畿内地域で特徴がみとめられる。

このように畿内地域の出土絵馬に特徴的な絵馬の意匠があることがわかる。これまでにも難波の宮跡や平城京周辺出土絵馬については、その図像などに共通性が存在することが指摘されている。そしてそれらの共通性をもった絵馬の一群を、「都城型絵馬」というまとまりでとらえようとする意見も出されている（江浦 2006）。今回の出土絵馬における馬の絵画表現からは、この「都城型絵馬」というまとまりの存在は追認することができる。平城京の周辺で出土する絵馬には、他地域の絵馬と

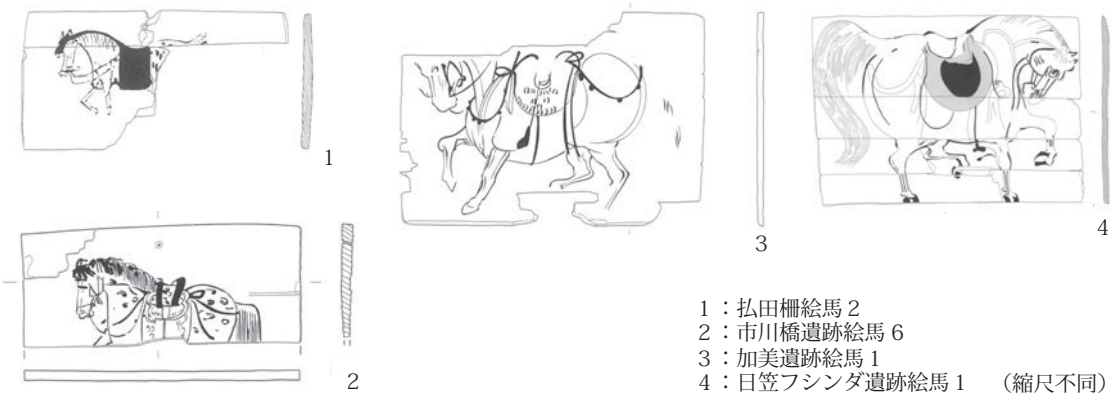


図７　絵馬の飾馬における鞍の表現

は異なる規範が存在すると考えられる。

Ⅲ．絵馬の使用方法

ここからは、絵馬の使用方法を出土絵馬から復元する。出土絵馬の使用方法を検討する際に、有力な手がかりとなるものとして絵画資料をあげることができる。まず絵画表現のなかの絵馬から、絵馬の使用方法を検討していく。

まず絵馬の使用方法として描かれているものに、懸けて使用する方法があげられる。永仁４年（1296 年）に作成された『天狗草子絵巻』東寺巻には、東寺中門回廊にもうけられた祈願所の壁に絵馬が懸けられている様子が描かれている（図８）。また観応２年（1351 年）に作成された『慕帰絵詞』第七巻第一段には、紀州玉津明神の神木に２枚１対の絵馬が懸けられている様子が描かれている（図９）。これに対して、地面に挿し立てて使用する様子が描かれるものがある。弘安 11 年（1288 年）に作成された日枝神社所蔵『紙本著色山王霊験記』には、御幣をたてた祭壇の下に板立絵馬が挿し立てられている様子が描かれている（図 10）。このように、絵画資料には懸けて用いる絵馬と、挿し立てて用いる絵馬の２種類が描かれている。

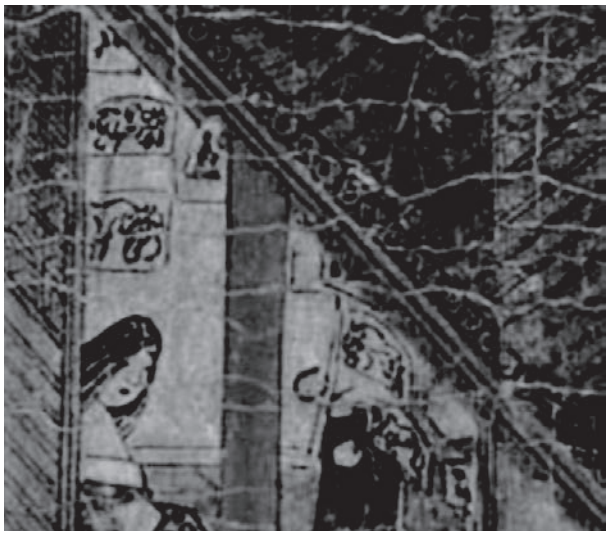


図８　『天狗草紙絵巻』東寺巻（部分）

図９　『慕帰絵詞』第七巻第一段（部分）

この絵画資料で描かれている絵馬の使用方法から出土絵馬の使用方法を検討する際に重要な視点として、絵馬上辺中央付近の孔や釘の有無をあげることができる。この絵馬上辺における孔は、懸けて用いる際に紐などを通すために用いられるものである。また釘の痕跡があるものは、絵馬を釘で打ち付けていたものと考えられる。これに対して出土絵馬のなかには、このような孔や釘の痕跡がみとめられないものが存在している。このような例については、絵画で描かれたように挿し立てて用いられていたものと考えられる。

このように出土絵馬には大きく懸けて用いるものと、挿し立てて用いるものの２種類があると考えられる。ではこの２種類の使用方法の差異は、何に起因するものであろうか。絵馬の使用方法と地域性の関係であるが、上辺中央付近に孔をもつ絵馬は、各地に広く分布するものの、平城京周辺の絵馬には上辺中央付近に孔がない。一方この差異が時期的なものによるものであるのかをみると、絵馬が広く使用されはじめる８世紀の段階で両者はすでに存在している。よってこの差異は時期的な要因に

図 10　『紙本著色山王霊験記』（部分）

よるものではないことがわかる（図 11）。

このように絵馬の使用法は大きく懸けて用いるものと、挿し立てて用いるものの２種類に分類することができるのがわかる。出土絵馬の懸孔の有無から、当時の絵馬は懸けて用いられるのが一般的であったことがわかる。しかし平城京周辺では絵馬に懸孔がみとめられず、挿し立てて用いられるのが一般的であったことがわかる。またこの使用方法の差異は、時期的な差異によって生じるものではなく、絵馬の祭祀の地域性を示しているものであることがわかる。

Ⅳ．出土絵馬からみた絵馬祭祀の起源

（１）文献記録からみる絵馬祭祀の起源

ここまで出土絵馬について、絵画表現や絵馬の使用方法の点から検討をおこなってきた。ここからは、絵馬祭祀および絵馬の起源について検討していく。

馬を用いた祭祀は文献上にも多々登場する。ここではそれらの文献記録を読み解き、絵馬祭祀の起源およびその変遷を検討する。

『続日本紀』文武天皇二年（698 年）四月九日条に、旱魃のため芳野水分峯神に馬を奉じる、という記述がある。これは国家が神に馬を献上するという、文献上にあらわれる最初の記事である。以降、馬を神に献上するという記事がたびたび見られるようになる。『続日本紀』天平宝字七年（763 年）には降雨祈願のために黒毛馬を、また宝亀六年（775 年）には雨止めのために白毛馬を、それぞれ丹生川上社に奉じるという記述が出てくる。これらの記事は、祈願する目的によって奉納する馬の種類が異なっていたことを示している。

一方、文献上には国家以外を主体とする馬の祭祀も記

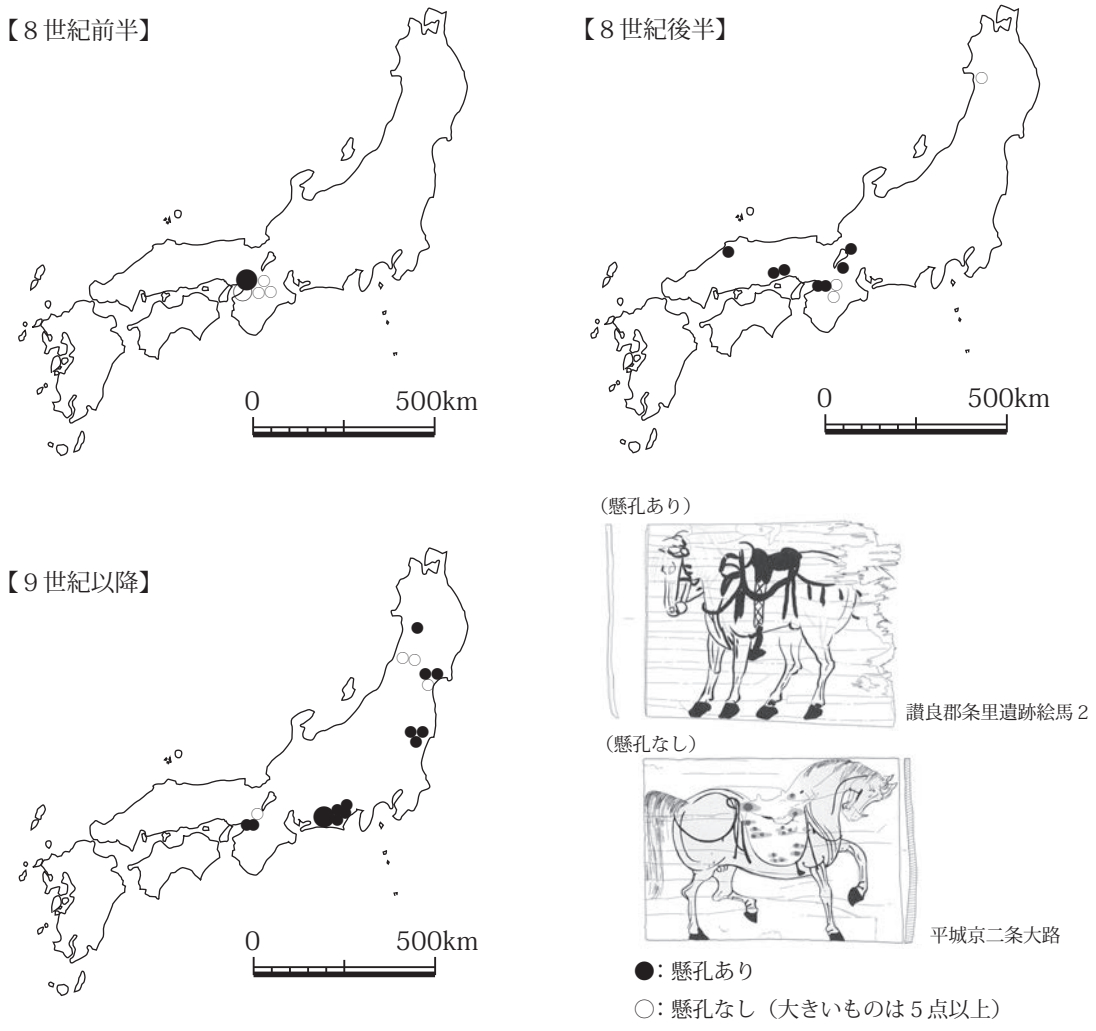


図 11　出土絵馬の懸孔の有無とその分布

録されている。『日本書紀』皇極天皇元年（642 年）七月二十五日条に、「村々の祝部の徒教の随に、或いは牛馬を殺して諸の神に祭る。或いは頻に市を移す。或いは河伯を禱る。…」という記述がある。その後も、『続日本紀』天平十三年（741 年）二月七日条、延暦十年（791 年）九月十六日条や『日本略記』延暦二十年（801 年）四月などに牛馬の屠殺に関する記事がある。

これらの文献資料の記述から、国家主体の馬を用いる祭祀は目的に応じて種類を使い分けて、馬を献上する祭祀であることがわかる。そして馬を献上する際には、馬の屠殺はおこなわれないものと考えられる。これは『続日本紀』中に牛馬の屠殺を禁止する記事が散見されることからも裏付けられよう。それに対して、民衆や共同体での祭祀においては牛馬の屠殺がおこなわれることが、記録から読みとくことができる。

このような文献記録と照らし合わせると、絵馬祭祀はどのように位置づけることができるであろうか。絵馬の使用は、牛馬を屠殺しない祭祀である。これは、牛馬を屠殺する一般民衆の祭祀とは大きくことなり、屠殺をおこなわない国家主導でおこなわれる祭祀との共通性があるものと考えられる。なお絵馬という言葉に関する最初の文献上の記録は、『本朝文粋』第十三の寛弘九年（1012 年）六月二十五日の記事である。この記事には、大江匡房が北野天満宮に奉納した物品の目録「北野天神供御弊種々物文」があり、そのなかに「色紙絵馬三疋」とあるのが「絵馬」という言葉の初出となる。

（２）日本出土絵馬における表現の起源

ここまでは文献上の記録に残された絵馬祭祀、馬を用いる祭祀の起源およびその変遷についてみてきた。ここでは、絵馬に描かれた馬の表現方法の起源について検討する。日本列島では古墳時代以降、馬に関する造形があらわれる。これには馬形埴輪のような立体造形物と、古墳壁画などの平面造形物の２種類がある。ここでは後者と絵馬の絵画の関係性について検討をおこなう。

日本列島において馬が平面的に描かれるようになるのは、現状確認されている範囲では古墳時代中期後半以降、５世紀後半以降のことである。江田船山古墳出土銀象嵌銘入大刀には、銀象嵌の馬の文様がみとめられる（図 12－１）。

６世紀の時期の馬の絵画は、九州地方の壁画古墳中にみとめられる。以下、代表的な例についてみていく。TK10 型式期（田辺 1981）に築造される桂川王塚古墳では袖石部に騎馬人物像が描かれている（図 12－２）。また TK43 型式期に築造される竹原古墳では奥壁部に人物に曳かれた馬が描かれている（図 12－３）。前者の馬の表現は馬装が描かれており、また後者の馬にはたてがみが表現されており、同時代の他の馬の絵画表現と比較しても、精巧なものである。しかしこれらの馬の表現は、実際の馬と比較するとかなりデフォルメされた表現がなされている。また馬装についても実物の馬装と比較すると、簡易な描写となっている。

７世紀代にはいっても、その傾向が継続する。岡山県の平福から出土した土師質切妻式家形陶棺には、身の小

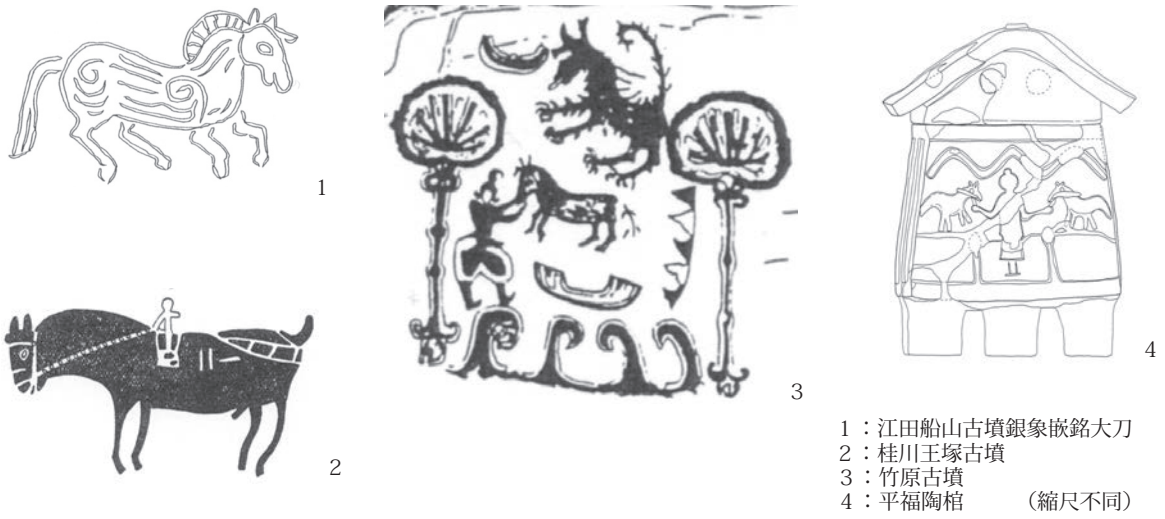


図 12　古墳時代の日本列島における馬の表現

口部分に粘土を貼り付け人物とその両脇に馬を表現している（図 12 －4）。また同じく岡山県の唐松から出土した須恵器平瓶には、肩部に騎馬人物や建物の線刻画が刻まれている。これらの例は、ともに７世紀半ばの事例と考えられる。これらの馬の表現についても、実物の馬とはかけはなれた姿をしている。このように、６世紀から７世紀にかけての日本列島の伝統的な馬の絵画は、実物とは大きく姿を異にする写実性を欠くものである。

このような状況ののち、絵馬が使用されるようになると、その表現には大きな変化がみられるようになる。馬の表現が非常に写実的になり、馬装を含めた馬全体の絵が非常に精緻なものとなる。また表現に規格性があらわれるようになり、共通の馬装表現、歩様表現などもうまれるようになる。このように、絵馬の馬の表現は、前段階までの日本列島における馬の表現とのあいだに、大きな飛躍をみとめることができる。

この表現の飛躍は日本列島内独自での発展と考えるより、外部からの影響により生起したものと考えるほうが、より蓋然性が高いと考えられる。ここで問題となってくるのが外部からの影響とする場合、その影響がどこからもたらされたのかという点である。ここで重要となるのは、中国大陸である。以下、中国大陸における馬の絵画の様相についてみていく。

中国における馬の表現には日本列島と同様に、立体的表現と平面的表現の２種類がある。このうち前者には俑などがあり、後者には壁画などが含まれる。ここでは絵馬における馬の描写と比較するため、壁画など平面的な表現を中心にみていく。

図 13　秦阿房宮２号宮殿壁画

中国では馬およびそれに類する表現は古くから存在しているが、のちの日本の絵馬に通ずるような写実性に富んだ注目すべき資料としては、秦代の阿房宮２号宮殿の壁画があげられる。阿房宮２号宮殿の壁画には４頭立て馬車図が描かれている。この馬車図の馬は、いずれも「フライング・ギャロップ」の歩様をしめす（図 13）。

漢代には多くの馬の図像が描かれるが、それらの多くは石刻や画像石であり、これらに比して壁画の数は少ない。この時期になると「側対歩」の歩様の馬の図像が散

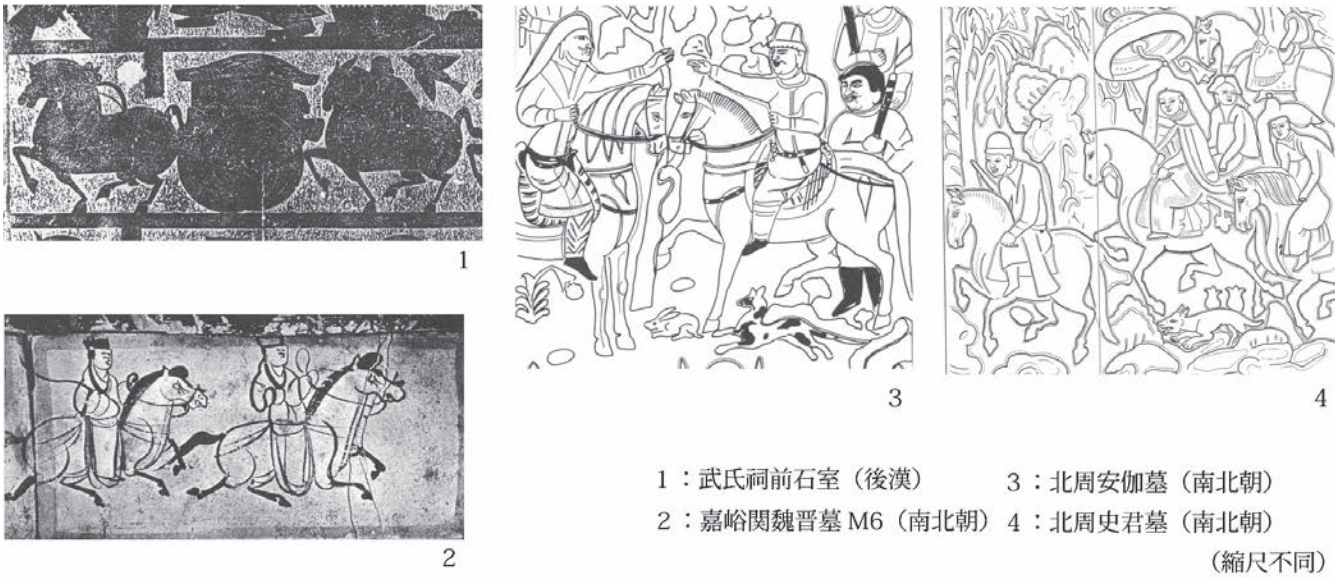


図 14　魏晋南北朝以前の中国大陸における馬の表現

見されるようになる。例としては山東省嘉祥県の武氏祠（図 14 －1）などがあげられる。また漢代には馬の立体的表現として俑および石造、青銅製のものがあるが、これらのうち武威雷台東漢墓で出土した著名な「銅奔馬」は、「側対歩」と「フライング･ギャロップ」が合わさったような歩様を示しており、注目される。このように漢代にはすでに画像石などを中心に「側対歩」歩様の馬の図像が広まっていたことがわかる。

魏晋南北朝時代にはこれまでの墓室壁画などに加えて、墓室内の石障などにおいても馬の図像が増加していき、そのなかに「側対歩」の馬が散見される。この時期の墓室壁画例には酒泉丁家閘 5 号墓や嘉峪関魏晋墓（図 14 －2）などがあげられ、前者は墓室内に「側対歩」歩様の神馬が、後者は出行図に「側対歩」歩様の馬が描かれている。この時期の「側対歩」歩様の馬の図像は現在の甘粛省域などの西方や北魏の領域などに多くみとめられる。また西安近郊などの中原地域でも確認されるが、これは北周安伽墓（図 14 －3）や北周史君墓（図 14 －4）などのように墓の被葬者が、ソグド人などの西域出身者であったり西域との関係が深い人物であったりする例が目につく。これらの例では前者は石槨に、後者は石屏に「側対歩」歩様の馬の図像が彫り出されている。このように魏晋南北朝時代には馬の「側対歩」表現が広まっていくが、この段階では北方地域や西方地域といった中原地域の周辺部、およびそれらの地域の影響をうけた墓でみられるのが一般的である。

唐代になると、日本出土絵馬の図像を考えるうえで重要な例があらわれる。当時の都であった長安や洛陽などの周辺には、皇帝陵をはじめとした多数の陵墓が築造される。これらの陵墓には多数の壁画墓が含まれており、この壁画は日本の絵馬の図像の起源を考えるうえで重要である。乾陵の陪葬墓区内に位置する章懐太子李賢墓（706 年）（図 15－2・3）では、墓室のほぼ全面に壁画が描かれている。これらの壁画のうち墓道に描かれた出行図では、多数の「フライング・ギャロップ」の歩様をとる馬が描かれているが、そのなかに「側対歩」の馬の絵も描かれている。また献陵の陪葬墓区の北東に位置する嗣虢王李邕墓（727 年）（図 15－4）では、墓道に牽馬図が描かれているが、この牽馬図の馬は「側対歩」の歩様をとる。このように長安周辺などの中原地域の陵墓においても、唐代になると墓室壁画に「側対歩」の馬が描かれるようになる[3)]。

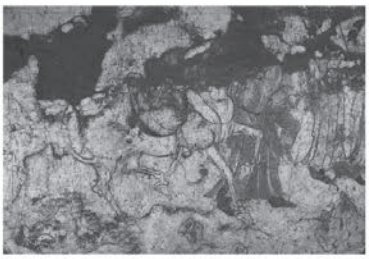
このように唐代には、これまでは北方地域や西方地域を中心としてみとめられた「側対歩」表現の馬の図像が、西安を中心とした中原地域においても壁画や手工業製品などの多岐にわたってみとめられるようになる。

ここまで中国大陸における馬の図像、および馬の図像の「側対歩」表現についてみてきた。すくなくとも漢代

1

2

3


4

1：唐李寿墓（631 年）
2・3：唐李賢墓（706 年）
4：唐李邕墓（727 年）
（縮尺不同）

図 15　唐代の中国大陸における馬の表現

には画像石を中心として「側対歩」の馬の図像は確認されるようになるが、壁画例はまだ稀である。魏晋南北朝以降には墓室壁画例においても「側対歩」歩様の馬の図像例が増加していくが、この段階では中原地域ではなく、北方地域あるいは西方地域を中心として「側対歩」の馬の図像が分布している。そして隋唐期になると長安周辺の皇帝陵の陪葬墓区内などにおいても、「側対歩」歩様の馬を描いた墓室壁画が描かれるようになる。

このような中国大陸での様相が日本列島にもたらされる要因として、遣唐使があげられる。最初の遣唐使は舒明天皇二年（630 年）に日本を出国し、舒明天皇四年（632 年）に帰国している[4)]。その後寛平 6 年（894 年）に停止されるまで、遣唐使が派遣されている。日本列島における最古の絵馬は難波宮跡北西谷から出土したものである。これは「戊申年」（648 年）銘の木簡と共伴して出土しており、共伴土器から 7 世紀第 4 四半期をくだらないと考えられている。この 7 世紀後半という難波宮における絵馬祭祀は、同時期にほかに例は現在のところ確認されておらず、難波宮のみでおこなわれた、きわめて特殊な事例であった可能性も考えられる。650 年代、660 年代は遣唐使が頻繁に往来していた時期であり、この大陸との交流によって絵馬の図像に関する情報も得られていたものと考えられる。この時期には『日本書紀』中に地震や旱魃、洪水などの災害に関する記述が頻出しており、このような情勢が契機となり絵馬祭祀がおこなわれたものと考えられる。このように 7 世紀後半には絵馬祭祀が執り行われるようになるが、これは現状で確認できるのが難波宮のみときわめて限定的な特殊なものであったようであり、これ以降しばらくの期間は絵馬の出土は知られていない。このように最初期の絵馬祭祀は場所、時期ともにきわめて限定的なものであったと考えられる。

また絵馬の使用数が増加するようになるのは、平城京二条大路出土例や日笠フシンダ遺跡出土例など年輪年代や共伴木簡などから、740 年前後であることがわかる。『続日本紀』には天平 9 年（737 年）4 月以降、全国的に疫病や旱魃が発生し、これを鎮めるために祭祀、大赦、賑給をおこなう記録がでてくる。全国的な疫病や旱魃を鎮めるために、ひろく絵馬祭祀がおこなわれるようになったものと考えられる。この際に絵馬に描かれる馬の描写方法には、あらためて遣唐使によってもたらされた技術・情報が取り入れられたものと考えられる。そしてその場合には、第 8 回（702 年）、第 9 回（717 年）または第 10 回（733 年）の遣唐使による可能性が考えられる。

なお律令制下の日本においては中務省下の図書寮で内外の典籍を管理し、筆・墨・紙の製造や、宮内の仏像管理などを担当している。また同じく中務省下の内蔵寮では海外からの文物の管理をおこなっていた。そしてまた中務省には画工司がもうけられ、画師が配属されている。このことから中務省において画工司は海外からの文物に接触することができる環境にあったという指摘がなされている（廣岡 2011）。これをふまえると、絵馬の創作に関しても中務省や律令国家の関与を想定する必要があるのかもしれない。この点については、絵馬が唐尺を用いて規格的に生産された可能性がある点も考慮する必要があろう。

V．まとめと今後の課題

ここまで出土絵馬について、おもにその意匠から検討をおこなってきた。日本出土絵馬には板材の用材や表現方法に規格性がみとめられる一群が存在している。すなわち「側対歩」歩様の飾馬を描いており、飾馬の鞍は墨で塗りつぶして円形に表現されている一群である。また板材の木取りも柾目のものを多用し、絵馬の法量についても唐尺を用いて規格的に製作されたと考えられる。このような絵馬は平城京を中心とした畿内地域にみられるものである。

また絵馬の使用方法についても、大きく 2 通りのものが確認できた。それは懸けて使用する方法と挿し立てて使用する方法である。これらの使用方法は出土絵馬の形状および絵巻物などの絵画資料、両方から復元することができるものである。この使用方法は出土絵馬の上部の形状からも追認することができる。平城京周辺では絵馬に懸孔がみとめられず、挿し立てて用いられるのが一般的であったことがわかる。

このように出土絵馬には絵馬の意匠および使用方法について、規格性がみとめられる一群が存在していることがわかる。そのような一群は平城京を中心として分布しており、これまでにも「都城型絵馬」の存在が指摘され

てきたが（江浦 2006）、絵馬の形状や使用方法に一定の規範が存在していたことがあらためて確認された。

また絵馬における馬の図像の起源について、とくに「側対歩」表現の馬の図像について、中国大陸からの影響を想定した。中国大陸における「側対歩」歩様の馬の絵画表現は、中原地域では唐代に一般的になり、これが遣唐使によって日本へともたらされたと考えられる。絵馬に描かれた馬の表現は、絵馬以前の日本列島における馬の表現とは大きく異なっており、純粋な日本列島内における絵画技術からの発展とは考えがたく、外からの技術・技法の流入と考えるほうが、より妥当性が高い。

今回は、絵馬そのものの分析を中心におこなってきた。そのために絵馬以外の祭祀遺物との関係を検討する必要がある。絵馬は人面墨書土器などといった他の祭祀関連遺物と共伴する事例も多く、祭祀関連遺物全体のなかで位置づける必要がある。また絵馬と出土馬骨との関係も重要な課題である。絵馬をもちいた祭祀と実物の馬をもちいた祭祀は、その催行主体が異なる可能性を指摘したが、実際の発掘事例から検証する必要がある。両者の関係をあきらかにすることは、当時の祭祀全体における絵馬祭祀の位置づけを検討するうえでも重要である。

今回の分析では平城京を中心とした畿内地域を中心とした絵馬に、一定の規範が存在した可能性を指摘した。この絵馬の規範が地方の絵馬にどのように影響をあたえているのか、絵馬の図像や形状の差異だけであるのか、それとも絵馬祭祀の内容にも差異が存在しているのか、といった点についても検討を加える必要があろう。

また絵馬に描かれた馬の表現技法の起源に関してもより詳細な検討が必要である。本稿では絵馬の図像、なかでも都城周辺で多くみとめられる「側対歩」表現について、中国大陸からの影響を想定した。今回の検討では中国大陸における馬の図像の変遷を概観しただけであったが、中国大陸内における図像の変遷に関して、より詳細に検討をおこなう必要があろう。また中国大陸から日本列島への図像の情報移入の過程についても、さらなる検討が必要である。

このように解決すべき課題は多数残されている。今後も検討をすすめ、絵馬および絵馬祭祀のもつ意味とその背景をあきらかにしていく必要がある。

註

1）静岡県で絵馬の出土数が多いのは、静岡県考古学会によって全県的な木製品の大規模かつ精緻な集成がおこなわれた結果（静岡県考古学会 2005）、多くの資料が認識されるようになったことも影響していると考えられる。

2）払田柵跡出土絵馬に描かれた飾馬の鞍は、泥除と一体のものとして表現されており、結果として馬装全体が方形の墨の塗りつぶしによって表現されている。

3）唐代には墳墓からは三彩馬をはじめとして、多数の馬俑が出土している。これらの馬俑は立体的造形物であるため、その造形の表現に物理的な制約がかかってくる。すなわち馬俑が「側対歩」表現をとろうとすると、片側の前後肢をあげなくてはならず、その場合俑の安定が大きく損なわれることになる。このため馬俑などの立体的造形物の場合には、基本的には「側対歩」表現がとられないものと考えられる。

4）法隆寺献納品の龍首水瓶には胴部の紋様に天馬が彫られているが、これは「側対歩」の歩様をとる。この龍首水瓶はこれまで初唐期の中国で製作されたと考えられてきたが、近年は日本列島での製作の意見が大勢を占めるようになっており、またその製作時期についても図像の特徴から 7 世紀末から 8 世紀初頭にかけての時期とする見解も出されている（加島 2012 など）。

参考文献

岩井宏實 1974『ものと人間の文化史　絵馬』法政大学出版局

江浦洋 2006「難波宮跡北西部出土の絵馬」『大坂城址Ⅲ』大阪府文化財センター

加島勝 2012「法隆寺の工芸品―法隆寺献納宝物の金工品を中心に―」『日本美術全集第 2 巻　飛鳥・奈良時代Ⅰ　法隆寺と奈良の寺院』小学館

金子裕之 1985「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 7 集　国立歴史民俗博物館

静岡県考古学会 2005『静岡県における原史・古代の木製祭祀具』

末崎真澄 1987「古代の美術にみる馬の伝統的表現」『馬の博物館研究紀要』第 1 号　馬事文化財団

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

次山淳 2000「平城宮内裏北郭出土の絵馬資料」『奈良国立文化財研究所年報 2000 －Ⅰ』奈良国立文化財研究所

戸澗幹夫 2012「絵馬研究の歩みと考古学－絵馬起源論を中心にして－」『石川県立歴史博物館紀要』第 24 号　石川県立歴史博物館

中山太郎 1930「絵馬源流考」『旅と伝説』十月絵馬号　三元社

廣岡孝信 2011「軒平瓦紋様の創作と画師－古代日本と中国・朝鮮半島との対比－」『勝部明生先生喜寿記念論文集』勝部明生先生喜寿記念論文集刊行会

北條朝彦 2009「古代「絵馬」祭祀論―難波宮跡北西部と奈良県日笠フシンダ遺跡から出土した「絵馬」を中心に―」『續日本紀研究』第 381 号　續日本紀研究会

松尾充晶 2006「出土絵馬の評価」『青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編）』島根県教育員会

水野正好 1978「まじないの考古学・事始」『季刊どるめん』18 号　萩書房

水野正好 1983「馬・馬・馬－その語りの考古学」『文化財學報』第 2 集　奈良大学文学部文化財学科

柳田國男 1930「絵馬と馬」『旅と伝説』十月絵馬号　三元社

挿図出典

図 6

1：財団法人大阪府文化財センター 2006『大坂城址Ⅲ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第 144 集

2：奈良国立文化財研究所 1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第 54 冊

図 7

1：秋田県教育委員会 1998『払田柵跡―第 110 ～ 112 次調査概要―』秋田県文化財調査報告書第 280 集

2：多賀城市教育委員会 2003『市川橋遺跡』多賀城市文化財調査報告書第 70 集

3：公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所 2016『加美遺跡発掘調査報告Ⅶ』

4：奈良県立橿原考古学研究所 2011『日笠フシンダ遺跡』奈良県文化財調査報告書第 144 集

図 8　小松茂美編 1993『続日本の絵巻 26 土蜘蛛草紙 天狗草紙 大江山絵詞』中央公論社

図 9　小松茂美編 1990『続日本の絵巻 9 慕帰絵詞』中央公論社

図 10 小松茂美編 1992『続日本の絵巻 23 山王霊験記 地蔵菩薩霊験記』中央公論社

図 11

財団法人大阪府文化財センター 2004『讃良郡条里遺跡（その 1)』（財）大阪府文化財センター調査報告書第 109 集

奈良国立文化財研究所 1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第 54 冊（図 6-2 と同じ）

図 12

1：東京国立博物館 1993『江田船山古墳出土国宝銀象嵌銘大刀』

2：梅原末治・小林行雄 1940『筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第 15 冊　京都帝国大学文学部

3：若宮町教育委員会 1982『竹原古墳』若宮町文化財調査報告書第 4 集

4：美作町史編集委員会 2006『美作町史 資料編 1』美作市

図 13　中国社会科学院考古研究所・西安市文物保護考古研究院・西安市秦阿房宮遺址保管所 2014『阿房宮考古発現与研究』文物出版社

図 14

1：朱錫祿 1986『武氏祠漢画像石』山東美術出版社

2：甘粛省文物隊・甘粛省博物館・嘉峪関市文物管理所 1985『嘉峪関壁画墓発掘報告』文物出版社

3：陝西省考古研究院 2003『西安北周安伽墓』文物出版社

4：西安市文物保護考古研究院 2013『北周史君墓』文物出版社

図 15

1：陝西歴史博物館 2017『中国古代壁画　唐代』広西美術出版社

2・3：陝西省博物館 1974『唐李賢墓李重潤墓壁画』文物出版社

4：陝西省考古研究院 2012『唐嗣虢王李邕墓発掘報告』科学出版社

表１- １　出土絵馬集成①

			時期	法量(縦×横)cm	向き	懸垂	性表現	馬装	材質	木取り	備考
秋田城跡		秋田市高清水	8C後半	(10.0)×18.0	左	無	無	裸馬			
払田柵跡	絵馬1	大仙市払田	9C前半	15.1×(2.3)	左	不明	無	飾馬			
	絵馬2		9C前半	9.6×18.5	左	掛孔	不明	飾馬	スギ	追柾目	
市川橋遺跡	絵馬1	多賀城市	平安	(5.7)×23.5	左	不明	不明	不明		柾目	
	絵馬2		平安								
	絵馬3		平安		左	不明	不明	不明		柾目	
	絵馬4		平安	(9.8)×18.2	左	不明		裸馬		板目	
	絵馬5		平安	19.2×26.1	左	掛孔		飾馬	ヒノキ	追柾目	
	絵馬6		平安	(8.3)×19.8	左	掛孔		飾馬		柾目	
	絵馬7		平安	(10.7)×22.4	左	無		裸馬		板目	
道伝遺跡	絵馬1	東置賜郡川西町	平安後期	8.1×13.0	左	無	不明	裸馬？		板目	
	絵馬2		平安後期	7.5×8.7	左	無	無	飾馬		柾目	
荒田目条里遺跡	絵馬1	いわき市平菅波	奈良・平安	13.0×21.2	左	掛孔	無	裸馬	ヒノキ属	板目	
	絵馬2		奈良・平安	19.7×20.9	右	掛孔	不明	不明	ヒノキ属サワラ	板目	
	絵馬3		奈良・平安	(6.4)×24.0	右	不明	不明	飾馬	ヒノキ属	板目	
	絵馬4		奈良・平安	(3.6)×(8.6)	左	不明	無	不明		板目	
	絵馬5		奈良・平安	16.2×26.1	絵無し	掛孔			ヒノキ属	板目	絵馬板材
川合遺跡(八反田地区)		静岡市葵区南沼上	8C	(2.9)×(13.6)	右	不明	無			板目	
川合遺跡(志保田地区)		静岡市葵区南沼上	奈良・平安	(3.1)×11.8	左	不明	無	飾馬		板目	
宮下遺跡		静岡市葵区南沼上	平安前期	10.1×17.2	絵無し	掛孔			スギ	板目	絵馬板材
神明原・元宮川遺跡		静岡市葵区南沼上	平安後期～鎌倉	(4.6)×10.6	左	掛孔	無	裸馬			牽馬
郡遺跡		藤枝市郡	8・9C	7.3×13.1	左	掛孔	無	裸馬			木簡再利用
水守Ⅱ(平島)遺跡		藤枝市	奈良・平安								
清水遺跡	絵馬1	藤枝市	平安前期	10.6×17.3	左	掛孔	無		ヒノキ		牛？
	絵馬2		平安前期		絵無し	掛孔					絵馬板材
御殿・二之宮遺跡		磐田市二之宮	8・9C	12.8×18.3	絵無し	掛孔					絵馬板材
伊場遺跡	絵馬1	浜松市中区南伊場町	9C後半	9.6×11.95	左	掛孔	無				牛
	絵馬2		9C後半	7.6×11.8	左	掛孔	無	裸馬			
	絵馬3		9C後半	(3.3)×14.5	左	不明	無				牛
	絵馬4		9C	5.85×13.45	左	掛孔	無				
	絵馬5		9C	7.3×8.9	左	掛孔	無	裸馬			
	絵馬6		8C中	7.05×11.4	左	掛孔	無	飾馬			
	絵馬7		9C	7.5×13.5	左	掛孔	無	裸馬		追柾目	
梶子遺跡		浜松市中区南伊場町	8C前半	(4.0)×11.5	絵無し	不明					絵馬板材
梶子北遺跡		浜松市中区南伊場町	8C	5.9×10.1	左	掛孔	無	裸馬		板目	
中村遺跡	絵馬1	浜松市中区南伊場町	8C	(4.5)×10.5	左	不明	無	裸馬	ヒノキ	板目	
	絵馬2		8C	12.4×(20.0)	左	掛孔	不明	飾馬	ヒノキ	柾目	
大将軍遺跡		草津市追分町	8C後半	16.7×26.7	右	掛孔	無	飾馬	ヒノキ	柾目	
十里町遺跡		長浜市十里町	8C後半	16.8×23.7	左	掛孔	無	飾馬		板目	
平安京右京三条二坪		京都市中京区西ノ京下合町	9C中	(9.6)×26.4	右	無	不明	裸馬			
難波宮跡		大阪市中央区谷町	7C中	(5.7)×(11.5)	右	不明	オス	不明	スギ	板目	
	絵馬1		8C	15.88×23.15	左	掛孔	オス	飾馬		板目	
	絵馬2		8C	※×25.75	左	掛孔	無	飾馬		追柾目	
	絵馬3		8C	(9.42)×20.02	左	不明	無	飾馬		板目	
	絵馬4		8C	(2.60)×21.43	右	不明	オス	不明		柾目	
	絵馬5		8C	(11.76)×20.20	右	無	不明	飾馬		板目	
	絵馬6		8C	13.50×23.45	右	掛孔	不明	飾馬		板目	
	絵馬7		8C	(6.59)×(9.53)	左	不明	無	不明		追柾目	
	絵馬8		8C	(4.06)×(12.92)	左	不明	不明	不明		板目	
	絵馬9		759＋α	(10.33)×17.57	右	不明	無	飾馬		柾目	
	絵馬10		8C	(9.54)×22.53	右	不明	不明	飾馬		板目	
	絵馬11		8C	(8.18)×(21.63)	左	不明	オス	飾馬		板目	
	絵馬12		8C	(9.85)×30.16	左	無	無	飾馬		追柾目	
	絵馬13		8C	(4.72)×(17.29)	左	不明	不明	不明		板目	
	絵馬14		8C	(6.38)×23.59	右	不明	不明	不明		柾目	

表１- ２　出土絵馬集成②

			時期	法量(縦×横) cm	向き	懸垂	性表現	馬装	材質	木取り	備考
難波宮跡	絵馬15	大阪市中央区谷町	8C	(5.98)×25.98	右	不明	無	不明		板目	
	絵馬16		8C	(8.71)×22.72	右	掛孔	不明	飾馬		板目	
	絵馬17		8C	(4.46)×(15.06)	右	不明	不明	飾馬		板目	
	絵馬18		8C	(2.06)×(4.86)	右	不明	不明	不明		板目	
	絵馬19		8C	(6.15)×(18.19)	右	無	不明	飾馬		追柾目	
	絵馬20		8C	(4.92)×20.12	右	掛孔	不明	飾馬		板目	
	絵馬21		8C	(9.37)×(9.58)	左	不明	不明	不明		板目	
	絵馬22		8C	(3.23)×(22.86)	右	不明	不明	飾馬		板目	
	絵馬23		8C	(13.19)×23.98	右	掛孔	不明	飾馬		柾目	
	絵馬24		8C	(3.92)×(16.72)	左	無	不明	飾馬		板目	
	絵馬25		8C	(3.55)×(6.36)	左	不明	不明	不明		板目	
	絵馬26		8C	(3.57)×(14.56)	右	不明	不明	飾馬		板目	
	絵馬27		8C	(4.36)×(9.32)	不明	不明	不明	飾馬		板目	
	絵馬28		8C	(2.79)×(10.89)	不明	不明	不明	不明		板目	
	絵馬29		8C	(1.83)×(10.0)	左	不明	不明	不明		板目	
	絵馬30		8C	(3.35)×22.78	左	無	不明	不明		柾目	
	絵馬31		8C	(6.57)×14.72	左	無	不明	不明		板目	
	絵馬32		8C	(3.71)×(14.45)	不明	不明	不明	不明		板目	
	絵馬33		8C	(3.72)×(14.82)	左	不明	不明	不明		板目	
加美遺跡	絵馬1	大阪市平野区加美	8C後半	(9.5)×23.5	右	不明	オス	飾馬			
	絵馬2		8C後半	(6.5)×24.0	左	不明	不明	不明		板目	
	絵馬3		8C後半	16.5×24.0	左	不明	無	飾馬			
	絵馬4		8C後半	(6.0)×25.0	左	掛孔	不明	飾馬			
	絵馬5		8C後半	(13.0)×21.4	左	掛孔		裸馬			
長原遺跡		大阪市平野区長吉	8C	(5.2)×(11.6)	右	不明	不明	不明		柾目	
巨摩・若江北遺跡		東大阪市若江西新町	中世	(4.8)×(16.0)	左	不明	無	不明	スギ		
讃良郡条里遺跡	絵馬1	寝屋川市高宮	奈良末～平安	14.6×20.4	左	掛孔	オス	裸馬	ヒノキ	板目	
	絵馬2		奈良末～平安	21.7×27.4	左	掛孔	オス	飾馬	ヒノキ	板目	
深田遺跡		豊岡市水上	8C	(14.0)×(5.1)	左					板目	
入佐川遺跡		豊岡市出石宮内	中世	(4.9)×(5.2)	左	不明	不明	裸馬	二葉松	板目	
平城京左京三条二坊		奈良市三条大路南	8C前葉	19.6×27.2	右	無	オス	飾馬	ヒノキ	柾目	
平城宮内裏北外郭東区		奈良市二条町	8C中	(2.5)×27.3	左	不明	メス？	不明		柾目	
平城宮造酒司	絵馬1	奈良市二条町	9C?	11.3×18.6	右	無	オス	裸馬		板目	
	絵馬2		9C?	12.0×14.5	左	無	メス？	裸馬		板目	
平城京左京五条五坊二坪		奈良市大森町	8C前半	15×26	右	無		飾馬		柾目	
日笠フシンダ遺跡	絵馬1	奈良市日笠町	8C前半	19.6×27.3	右	無		飾馬	ヒノキ	柾目	
	絵馬2		8C前半	(12.5)×(11.7)	右	不明		飾馬		柾目	
	絵馬3		8C前半	(15.3)×(15.7)	右	不明		飾馬		柾目	
稗田遺跡	絵馬1	大和郡山市稗田町	8C	11.9×21.6	左			裸馬			
	絵馬2		8C		左			裸馬			
	絵馬3		8C								
	絵馬4		8C								
八条北遺跡		大和郡山市八条町	8C		左	不明				柾目	
青木遺跡		出雲市東林木町	8C後半～9C	9.88×12.45	左	掛孔	無	飾馬		追柾目	
鹿田遺跡	絵馬1	岡山市北区鹿田町	8C後半		左	掛孔		飾馬		追柾目	
	絵馬2		8C後半		左	掛孔				追柾目	牛曳猿
戸原麦尾遺跡		糟屋郡糟屋町大字戸原	11C後半	(6.0)×(14.1)	左	不明	無	飾馬	スギ	板目	
太宰府左郭八条九坊		大宰府市	鎌倉								